





Form of fragrance

梅津順一（鹿児芸術大学 芸術研究科造形複合）



『Form of fragrance』において、揮発し留まらない香りを、いかにビジュアルを持つ作品として展示するかについて悩まれた。

普段、私は香りを主に扱っての制作をしてはいない。絵画や、立体物を使って表現をしている。私の制作は「空間には何があるのか」という言葉から始まっている。物や、人が空間に存在する。世の中には様々な綺麗なものや、感動するものが存在する。私が手を加えなくとも、世界は美しいのではないかと思う。「もの」は様々な影響を周りから受けている。時間・光・重力など、様々な影響を受けながらそこに存在する。例えば、木は重力に逆らしながら、上手く光が受けられる方向へ伸びていく。そのものが持っている力と、外界の影響との狭間に形が作られていく。木だけではなく、全てのものが周りの影響を受けている。その関係性の中に何か意味のあるもののが存在するのではないかと思うか。モチーフとして、主体として扱われるものの周囲には何があるのか、というのが私のいつも持ち合わせている疑問であり、制作動機である。関係性の中で起こる現象を保存し作品とする、というのが私の制作である。

今回の制作において、香りをどう扱うか懸念事項が2つあった。1つ目は、香り単体を極めればパフューマーになってしまということ。そして、市販されている香りはすでに誰かの制作物であるという感覚があった。何か自分の制作物に香りを付して演出を行っても、自分の感覺が行き渡らないところで制作物が出来てしまうように思えた。香りを感じてもらう作品にするにはいかにオリジナルな香りを制作するかという壁があった。そのため、ものを削り素材

の香りを空間に充満させるなどの方法が制作当初のプランにいくつかあった。2つ目は、香りが視覚では捉えられないこと。当然のことながら、何らかの形で視覚化することが出来なければ、展覧会として成り立たない。以上のことから、香りそのものを主におかず、香料の広がる形をモチーフに自分の制作に繋げていった。

具体的な制作方法は、100枚ほど吸水性の良い紙を重ね、その上に香料を垂らし、放置する。1日経つと、香料が複数の紙に浸透しシミが出来上がる。下に行くほど、小さくなり、山を逆さにしたような形になる。それを乾かし、一枚ずつ切り出し、抜き取った部分と抜き取られた部分を元の形に復元し、展示を行った。香りがある部分と、ない部分に切り分けたものを、5点ずつ制作した。制作目的として、香料の作り出す形を立体的に抽出したかったこと、「人間にとっての香りの意味を探る」ということがあった。私の香りは、私から発せられるが肉体的には私の外にある。あまり、意識はされないが香りは人に様々な影響を与えているように思う。

実は遺伝子が遠いか近いか匂いで判断し、運命の人を決めているという説があるように、匂いや香りはコミュニケーションツールの1つであると考える。匂いや香りは、それを放つものの存在を保証しているのではないだろうか。このような疑問から、香りがある部分と無い部分を切り分けたら何が残るか、どちらが主となり得るのか、と思考しながら作品を制作した。

制作はあえて、香りのする部分と、しない部分を入れ子状になるように展示了した。結果として、どちらが主となるようなものではないと示したかった。周りの反応としては、形が綺麗、不思議な形をしている、大地の形みたいだというような反応をもらえた。立体的な形の面白さが目につき、平置きでの展示も考えたが、もともと平面作品を中心にして制作していたという経歴があり、どうしても壁掛けにしたいという欲求があった。影刻として展示しているのか、平面として展示をしているのかはっきりさせることで、より、明確にコンセプトを伝えられるようになるのではないかという点が反省点である。

The One Who Feels Like a Mermaid In The Water

Boris RAUX



Boris RAUXは、香りについてのアートを主に制作を行っている。今回の制作のテーマは、神話に登場するマーメイドを取り上げている。神話の中に登場する生き物や人物は、美しいものとして描かれることが多いが、実際に目の前にそのものたちが現れたら、もっと生々しくセクシャルなもので、マーメイドはきっと魚のような匂いがするだろう。

香りをアートに持ち込むときに、難しいことが2点ある。香りにビジュアルがないことと、それをビジュアル化する時にモチーフにならないよう、香りの本質をどう扱って制作物に落としこむか、という点である。単調に香りを制作物に付加するだけでは、コンセプトが弱くなってしまう。香りのみを扱い展示するとビジュアルが弱くなり、伝わりづらくなってしまう。そのような点において、今回のBorisの作品は香りの持つアリティーに目を向け、それを切り口に作品を開拓させており、香りそのものに対して興味を持つ向き合った作品であった。

今回の展示でBorisは、1.5メートルほどの大きさのマーメイドを思わせる装飾を施されたプールに魚の香りを入れ、機械によりそこからミストを発生させている。この展覧会では、ここまで展示であったが、前回の展示では、獣の香りがするケンタウロスを思わせる立体物と、魚の香りのするマーメイドを想像させるプールに、裸体の人間が入り神話の一部を再現するパフォーマンスを行っていた。展示の印象として、神秘的な印象とともに、製作者の人柄

だろうか、重々しくなりすぎない軽やかな印象も受けた。Borisはこれまでに、人が1日に使うシャンプーやリンス、整髪剤など香料を含んだものを、人物ごとに分けて展示するという創作を行っている。これらの作品も、ビジュアルの軽やかさと、香りで人の存在を捉えようとする重みのあるコンセプトがうまく混在しているように感じる。

現代アートの世界において、香りや匂いを専門に扱っている作家はとても少ない。香りや匂いが性質上、不可視なもので一箇所に留まらないという難点があるからではないだろうか。だが、不可視で捉えがたいメディアだからこそ、表現できる場があるのではないか。また、嗅覚は視覚・聴覚による表現よりも直接的な感覚を見る側に与えることができる。匂いは一義的な感覚である。そんな中、嗅覚を利用したアートを展開しているBoris RAUXは注目すべき作家だと言えるのではないか。

(文責 梅津順一)

PIN

高尾みなみ(短期大学部 専攻科 美術学科)



香りはあらゆるものに確たる印象を与える。人間はにおいて瞬時に対象が心地よいものか不快なものか判断できるし、また香りの種類によって記憶や感情を刺激され、ありとあらゆる情景を頭の中に描くことができる。例えば一冊の小説を手に取ったとき、人は物語よりも先に「表紙」というビジュアルと、「タイトル」という対象の名前を目にする。読者はそれが一体どんな話なのかと想像する。そして次に文字からイメージーションを得て、経験したことない出来事を体感し、行ったことのない場所に行くことができる。まさにイメージの旅だ。今回の作品『PIN』は、そのイメージの旅を香りによって行うための、いわば装置である。まず電球をひっくり返したような形の瓶があり、それぞれにタイトルがついていて、中には様々な素材で構成された「景色」(これは小説という表紙にある)が閉じ込められている。鑑賞者はさらに瓶の蓋をあけ、中の香りを嗅ぐと、その3つの要素を結びつけてあらゆる場所や時代へのイメージを獲得することができる。以上が作品のコンセプトになる。

この『PIN』という作品は、京都の堀川団地で行われた2015年春の日仏交流展示で発表されたものだ。もともとは私だけでなく7人の合同制作で、それを引き継いでさらに深く切り込んだのが今回の『PIN』である。しかし前作品は堀川の狭い和室に設置するために作られたもので、作品本体のサイズが小さく、パリ国際大学都市の日本館という広くオープンな空間に置くためには設置方法を工夫せねばならなかった。そこで私は前回のインスタレーションで雰囲気づくりのために置いた「京都香旅研究所」という看板を採用し、「かつて京都に存在した研究所を再現した展示」という形をとって展示することにした。その研究所では文字どおり香りによる旅行体験についての研究をしており、「聖魔としての匂い」、「薬と病としての匂い」、「化学としての匂い」、「印象を付加する匂い」など、ありとあらゆる匂いについて調べていた。それをよりで選らせようというわけだ。アラントニスやシャンバラというとあまりに大きすぎるが、失われた京都の古い研究所というのはそれだけでノスタルジックでわくわくするような世界観を持っている。

具体的には、フランス人アーティストのボリス・ロウの好意で貸してもらうことになった棚のサイズに合わせ、上から順に設置するギミックを考えた。一番下、鑑賞する人の足下にくるのは、装置になくなかった「廃棄物の棚」である。貼られたラベルは塗りつぶされており、中身は擦りガラス越しにぼんやりと見えるだけ、本性を悟らせない。そのひとつは「魔女の棚」だ。これは魔女が腐った卵のような悪臭を漂わせているという俗説からとったので、中は暗い色の宝石と枯れた植物が入っている。さらにはその周りにはカラフェがあり、それぞれ「女性の髪」や「カラス」「杭」など不穏な名前が並んでいる。その上には研究所にあった写真や絵が額縁に飾られており、次にメイン五種類の瓶が並ぶが、これについては後述する。次は「化学の棚」だ。黒死病(ペスト)が大流行した十六世紀末ヨーロッパ人にとて「病」と病人や不浄な場所から漂う「悪臭」はほとんど同じものだった。対反に良い香りのするものは薬でもあり、大小色もさまざまな瓶の中に植物などの匂いのもとになる素材がすりと並べられている。そして一番高い棚は「聖人の棚」である。これは高潔な魂を持った聖人は、死してなお体から芳香が漂うという話からきている。横には「葡萄(ぶどう)」と「杭」。配置の構成としては、下にくくほど俗悪なものになり、上にくくほど聖なるものになるよう並びになっている。魔女とキリストには「杭」で磔刑にされ最期を迎えるという共通点があるが、放つそれが悪臭であるか芳香であるかでこんなにも言葉の持つイメージが異なるのだ。

メインの棚には、「宇宙」「淑女」「春の花」「初雪」「夏祭り」とばらばらの名前のついた瓶が並び、両隣には「どうぞお手にとって嗅いでみてください」と説明書きがある。当然どれ一つとして本物が入っているわけではない。「春の花」には花びらを模した薄布が入っているが、もちろん花そのものではないし、「淑女」のレースの切れ端は、どこかの淑女が使っていたレースのハンカチを使ってるわけでもない。初雪ならば雪を連想させるような白のビーズ、氷のような透明の樹脂パーツなど、今までイメージの助けとなる素材が詰め込まれているだけだ。しかし蓋を開けて嗅いでみると、中からはまるでその場にいるような、あるいは

それを連想させるような香りが漂う。瓶の中には記憶を辿り、ぴったりのイメージを探す旅に出る。日本人なら夏祭りは思い出にあるかもしれないが、フランス人にとっては宇宙と同じくらい未知のものだ。そうすると想像力を働かせて頭にイメージを創造するしかない。

この作品は言ってしまえばすべてが「それっぽい雰囲気のもの」でできている。棚の隅から隅までただの虚構の世界観にすぎない。なにかそれっぽい匂いのそれっぽいものがそれっぽく並んでいる。では「それ」とは一体なにか。「それ」は観る人の持つイメージであり、感じる雰囲気であり、目に見えない秘めたれた本質。まさに匂いの持つ本質ともいえる。悪臭を発するものが文字通り「鼻づまみ者」となるのが容易いように、馨しい香りは神聖さと正しさを含んでいる。人は常に匂いによって印象や感情を操られているのだ。

私の作品は、フランス人たちにそれなりに気に入ってくれた。手を伸ばして香りを楽しんでくれた方もたくさんいたし、見た目がこさまとしていて結構なものが多いので、特に女性に喜ばれたようだと思う。もちろんこの作品を観賞して「人は匂いによって操られている」などという感想を抱く人はいないだろうし、私も望んでいない。しかし物事には必ず核となる理由がある」という考え方を基本に持つヨーロッパ人たちが、この中心がぼっかりと抜けたような、雰囲気そのものを表現した日本の作品を、なんとなく受け入れてくれた。その事実が大切だ。遠いパリの地で、私の密かな試みは成功したといつていいくだろ。

les Infectés

Elsa MARC

エルザ・マークの作品は鑑賞者の目を引く鮮やかな青色をしている。青い顔料のしみ込んだコットンや、日本でいう金魚鉢のような丸いガラスの器に注がれた真っ青な水を見て、私は作品の設置をする彼女に「きれいな青色だね」と声をかけた。フランス語のパッケージだったので見てもそれが何という種類の青なのかは分からなかったが、知っている絵の具のなかではウルトラマリンやコバルトブルーに近いような、紫がかった青色だった。青色の水やコットンといふ素材のすっきりしたビジュアルの作品だったので、私はなんとなく広い海や高い空を連想したことを覚えている。

「青い色を見ると、たいていの人は空や海といった自然のものを思い浮かべる。けれどこの青色はナチュラルなものとは正反対の完全な化学物質で、毒性の強い青色なのだ」というのは、岩崎先生を通じて知った作者エルザの言葉である。まんまと引っかかった、というと適切ではないかもしれないが、私は彼女の想定したとおりの鑑賞者だったようだ。彼女の作品の大きな要素として、「ピュアルの美しさ」と「隠された意図」との大きな落差がある。そのギャップを知ったときのショックというは、無知を恵むような気持ちと、心底の輪がはずれた瞬間のような不思議な快感を作り出す。展示マップにあった彼女の言葉を読めば、作品に込められたものをさらに感じ取ることができるだろう。ただし、以下は私が意訳・解釈したものを多分に含んでいることを前提に読んでほしい。

な青緑色と化したドブ川の水が、ダッカに流れれる一大河川、ブリコンガ河に直接流れ込んでいるのだ」

改めてエルザの作品を見てみると、水の入った容器は二つあって、一つには草やゴミの絡んだ泥が沈殿しており、それによって「水が青い」という事実の異様さを際立たせている。何も知らない見たときはまったく印象が違う。顔を近づければ絵の具の人工的な匂いがする。ハザリバーグにある工場からの連れようのない悪臭が、その青色を通して漂ってくるようだ。目の前にある美しい青色がどうやって作られ、どのようにやってきたのか、鑑賞者は思いを馳せるだろう。そして目前にあるものがどういう道程を経てここへ辿り着いたのか、自分たちがいかにそういうことに対して無関心であったかを思い知らされる。

私見ではあるが、日本で「芸術」に頼らせるものをつくるとき、特に作者が若ければ若いほど、こういった強いメッセージ性を持つ啓発的なコンセプトは避けられる傾向にある。もし含んでいたとしても、彼女の作品ほど明確な形ではない。なぜなら日本でそれを行ったとしても、テーマの硬さから敬遠されてしまったり、心無いパッキングを受けたり、専門的な知識の欠如を揶揄されることもある。だから誰もそれを選ばないし、関心を示さない。そういった煩わしさを厭わずにはっきりとした「警告」に近い作品を展示了したことだけでも、私はこの作品を高く評価したい。

(文責 高尾みなみ)

「パンゲラデュは驚くべき不潔さを持つ国だが、そのなかでもダッカの近くにあるスラムのハザリバーグは世界でも最も汚染された土地のひとつである。ハザリバーグは古くパンゲラデュ独立前、東パキスタンの時代から牛革加工工場が密集し、産業クラスターとして発展してきた地域だ。牛革加工は縫製業に次いでパンゲラデュの主要産業であり、また主要外貨獲得手段でもある。ハザリバーグの環境汚染を雄弁に語るのは、なんといってもその悪臭である。牛革の生臭さと化学物質が混ざった異臭が濃い、人々は脳がえぐられるような臭いに嘔吐して、最後は病にかかる。そして産業廃棄物である化学薬品によって鮮やか



香りを食べる

竹内智子(造形学科 デザイン学科 観光デザイン領域)



私は作品の制作にあたり、まず「匂い」と「味覚」、そしてそこから繋がる記憶をテーマにしました。舌を感じる「味」は、実際には20%ほどだと言っている。食べ物の美味しさというものは、味覚だけでなく嗅覚が深く関わっているのである。匂いを嗅ぐという事は、食べ物を味わう事ではないだろうか。そこで、実際に作品に様々な香りを設置し、嗅いでもらうことで匂いを体感してもらおう、そこから「食べる」と「嗅ぐ」の関係性を作品にしたいと考えた。

日本で2015年春の日仏交流展示でもこの作品を展示了が、前回を踏まえて改善を行なった。作品のサイズが小さかったので、印象を強くするために匂いがついたお皿の枚数を増やした。広い想像力をもつてもらうために、使うのはあえて食べ物の匂いではなく、日本の香り、フランスの香りなどの抽象的なものにした。そのバリエーションを増やすため、アメリカ、ドイツ、イタリア等、その国らしいビジュアルのお皿に置いて展示した。匂いから色々な物を想像し、そしてその匂いが他の人とも共通しているのかを伝え合うことも大切だと考え、見た人が「どんな匂いを想像したか」を自由にカードに書いてもらおう設置してもらおう形にした。

実際に展示する場所を見るのが初めてだったので不安な点もあったが、ボザールの学生たちとの事前のやり取りを経て、現場で意見を出し合い、それぞれの作品に適し

た設置ができる。交流においては、言葉の違いなどで細かい意思疎通は難しいが、互いが伝えようと、いい展覧会にしようという気持ちがあったからこそ、なんとか伝え合っていくことができたと思う。自分の作品だけでなく、人手が足りないところは手伝う。そういったことが今回の成功に繋がったのかもしれない。

作品を制作する上で強く感じたのは、フランスの学生の創作意欲だ。フランス人たちの芸術への興味と教意、作品に対して真摯である姿勢は衝撃的だった。またフランスの人たちは作品を見ることにとても積極的で、日常的に芸術に触れてきているのだと感じられた。展覧会があれば気軽に足を運び、作品の作者がいれば意見を聞きに行ったり、質問したり、芸術に対する関心が高い。私の作品にもそれがよく出ており、机には多くの「どんな匂いを想像したか」に対する解答が残った。日本ではここまで多くの解答を得ることはできないだろう。匂いに関して彼らの感性は独特で、日常的に普段感じている匂いの違いも知る事が出来た。

今回展示をするにあたり、やはり国文化などの違いも確かにあるが、「芸術」というものに対する気持ちは同じなのだと実感する経験にもなった。芸術だけではない。そういった何かに対する志のもと、いろんな国々が繋がっていく可能性が見えてきた。私にとってもフランスでの交流、作品展示は大きな刺激となり、日本では学べないものを得ることができたと思う。

Échantillons

Clélie FOURNIAU



この作品は、彼女が2015年2月に日本の「宮島」に訪れた時の、自分が歩き感じた、視覚と嗅覚の記憶を表現している。作品にはプリントしたものや木材やペイントしたものを輪なりロープで繋げ、それを天井から地面まで伸ばしている。初めて見た時はそのスケールだけでなく、素材から醸し出される不思議な迫力を持った作品だと感じたのを覚えている。彼女から「宮島での記憶」だと教えてもらい、この吊るされているロープが、過去から未来に繋がっているようにも思えた。

ロープの間にある素材がその時の出来事であり、その時の香りを刻んでいるように感じる。宮島には多く自然が残っているので、木材をとおして森の香りを表現しているのかもしれない。地面に置かれた白い布が宮島の雲のようにも思われる。その中にもロープに巻き付けてある素材と同じものが置かれたり、更にペイントされた霧氹気が、どこか歴史を指しているようでもある。ロープが素材に巻き付いているのは「繋がり」の表現だろうか。視覚と嗅覚の結びつきかもしれないし、彼女自身の宮島で受け取った記憶の痕跡ともいえるだろう。

彼女は宮島のことを「half-man half-god island」と説明しており、私は彼女が人と神々が共に生きる島だと感じたのではと考察した。宮島には嚴島神社という1400年の歴史を持った世界文化遺産があり、名前の通り「神に裔くい

つく=仕える)島」という語源から、古代から島そのものが神として信仰されていた事が分かる。古くから神聖な山、森、岩、滝、巨木などには、「神」が宿るとされ、神殿がなくとも「神社」とされてきたのだ。私も一度、宮島に訪れたことがあります。島全体が「神」が宿しているような神秘的な空間に感じられた。しかし、彼女はそれだけでなく「half-man」ということで半分その島に住む人々を示しているのである。神がいる島もあるが、確かにそこに住む人々の暮らしがあるのであるのも事実。もしかすると現地に訪れた時に、島の人々と交流があったのかもしれない。どんな空間でも誰かがそこにいて、何かを作り上げ、時間を共に刻み、守ってきたものであるだろう。そこには匂いが必ず存在し、今までの折り重なった歴史をもそこに含まれている。彼女はその五感で感じた記憶を作品として表現することで、遠いこのフランスでも宮島の匂いを運びだすことに成功しているのである。

また日本では昔から天に高いものが神聖な場所とされ、高いほど神に近いとされている。彼女自身がその事を知っているかどうかは定かではないが、「ロープが天に昇っている」ように見え、日本人の私からすると神秘的なものに感じられた。どこかその表現が、日本の感性に類似しているようにも思えた。彼女は日本の本質的なものをその旅で感じ取ったのかもしれない。表現の方法、その場所で感じ取ったものをどう伝えるか、素直に自身の記憶から考え方にしていくことは私にとって衝撃であり、とても刺激になる作品だった。

(文責 竹内智子)

運ばれる空間

木暮愛李(芸術学部 デザイン学科 メディアデザイン系)



日仏交流の第二弾の作品を何にするか、という事を考えていた時“黒”という言葉が頭に浮かんだ。“黒”それは西洋において喪の色であり、使用人の制服の色である。いわば避けられてきた色であり、かのココ・シャネルがリトルブラックドレスを作り出すまでその負のイメージは抜けなかった。対して、東洋における黒とは墨の黒だ。即ちそれは書の黒であり、水墨画の黒である。書に広がる空間、水墨画に広がる空間。境界性の曖昧な余白を空間として扱い、そこに美を見いだす精神。そういうものは墨の香りをまとっている。

西洋における空間とは見えるものがすべてである。余白は余白であって、それ以上の意味を持たない。俳句を例にとってみよう。西洋では「古池や蛙飛び込む水の音」にある間や空気を想像しない。重要なのは、どのような種類の蛙が何匹飛び込んだか、そして古池とはどのような池なのか、という、具体的に見える事柄なのだ。写真の中の図像のように、あるかないかの二項対立である。

私は、匂いをモノとしてとらえずに、空間という概念としてとらえた。今回の作品は墨とボラロイド写真でできた花を重箱の中に形成し、墨とボラロイド写真の少々科学的な匂いのする花のひとひらを取って持ち帰ってもらおうというものだ。展示会場においては鑑賞者に行動を促すような説明文を作品近くに付加する事も考えたが、イラストでの説明文を試みた。それが、諷刺的のような効果を生み出していたようだ。それによって、アートを体験する空間という物を、創出できたと思う。そして、抜き取られていった花びらは鑑賞者のカバンの底で忘れ去られるかもしれないし、ゴミ箱に捨てられるかもしれない。しかし、この場合、花びらの行方は問題にならない。抜き取られていって形の崩れた花は静止する残骸ではない。空間という曖昧極まりない概念が具体的な形を持って広がっていく、という動画の1コマなのだ。

Les armées de Takeda

Jules LESBEGUERIS



Jules LESBEGUERISにとって、海苔というマテリアルは非常に魅力的に見えるようだ。2015年春の京都堀川団地の展示において、彼はトイレという空間に海苔でできたシェルターを建造した。完成時の異様な雰囲気、日を追うごとに剥がれていく海苔、後ろから漏れる電燈の光。その見た目の衝撃もさることながら、海苔の香りの強烈さは日本人である私にとっても衝撃的だった。そこには日本人とフランス人、はたまた東洋と西洋の考える「香りのアート」についての大きな違いを見ることがある。そういう意味で彼の一連の作品は、東洋と西洋の香りについての考え方の違いを視覚的に知ることのできる、恰好のサンプルでもある。彼らにとっての香りとはモノあっての香りであり、そこに曖昧な概念が入り込む余地はないのだ。今回の作品においても海苔で作られた陣営はやはり光に照らされている。

さて今回の作品について、彼はインスピレーション元のひとつとして黒澤明の映画『影武者』をあげている。武田信玄の影武者として生きねばならなくなつた男の苦悩は、脆い海苔とそれらが形成する影に集約されている。「ただの重し」と本人が語っていたが、海苔の陣営を強固に支える1セントコインさえ、本来ならば盗みの罪で処刑されるはずだった男が生きるために支払った代價の重さとも見れる事ができる。強大な力を持った大名一族が形成する一見壮大な陣営の體を表象するような海苔、うつろう光。このシンプルながら衝撃的なマテリアルを使った一連の作品群は、視覚的な衝撃もさることながら、その香りによって鑑賞者の記憶に長く残っていくだろう。

(文責 木暮愛李)

À ce moment

HILA YAMADA (Associate Degree Japanese painting)



~Description~

À ce moment is a live drawing performance accompanied by a piano recital of Poisson d'or by Debussy played by Yoko Yamada. Prior to the performance I chose a perfume, which was then sprayed into the air around the audience. They were then presented with six colour samples (pink, purple, yellow, light blue, blue and green) and asked which of these they imagined from the scent that now filled the room. I selected the three most popular colours for this work.

~Concept~

This work represents the space generated by every single person present at its moment of creation using synesthesia. It recognizes smell as the foremost sense in this spatial creation due to the inevitable ubiquity of scent, filling and drifting through the air we inhale. Therefore scent actually forms the essential foundation upon which this space is based on.

I think we are somehow conscious of the invisible spaces created by collective presence, but it's difficult to share our perceptions of them in the same way. Therefore in this work, smell assumes a role to unite the audience's experience of perception. In using their interpretations of scent to choose the colours for the piece, smell becomes the foundational sense that forms a relationship between them and me.

Crucially this spatial art consists of our collaborative work. It is said that Debussy composed Poisson d'or inspired by a laquer painting of a golden fish. He transformed this very visual image into music. Over a century later, I reversed the process by using the music in conjunction with the colours chosen by the audience to inform my drawing. In addition, I adapted a live improvised drawing style in order to capture the space contained within the constantly changing atmosphere.

Regarding the connection between smell and the music, I ordered a perfume especially for this performance, the detail of which can be found below in "Medium detail". Though smell acts as a unifying layer, none of the three elements of synesthesia used in this work trump one another. Indeed they are of equal importance, reflecting how in life we always feel things subconsciously using all three senses simultaneously.

It is important to note that although equal in importance, sense of smell has long been underestimated or even ignored by artistic society. I believe, however, that smell can connect to our primal instincts precisely because this sense occurs as a physical reflex that is not mediated. It is an instantaneous experience that exists like intuition, which is our most essential way to engage with art.

My goal with this piece was to let people feel something impulsively and enjoy sharing the moment of artistic creation together before considering the logic or philosophy behind having stimulated their instinctive perceptions in this way.

~Medium detail~

Perfume: I ordered it especially for this performance. It was made using several scent elements selected from a "fragrance scale" devised by the 19th century British perfume scientist, S. Peak. The pianist in this performance, Yoko Yamada picked the most significant chords from the

music and I, in turn, selected several scents (plumeria, pergalaria, musk, rose, violet and tuberose) to correspond to these musical notes. A perfumer then blended them to produce the final perfume.

Colors: I bought six different water-based coloured paints at a local department store to the performance space in order to localize my work.

Panel: I painted a 250cm x 100cm x 1cm thick wooden board in white emulsion.

~Criticism~

In one way, it could be said that the work was a success as I could feel very intense concentration from all of the audience (around 70 people) and that made it easier to gather the energy of the space we were sharing.

Additionally, the size of the panel was very moderate therefore making it big enough so as not to limit my movements, but not too big that I could not fully concentrate my energy within the time allowed by the music.

Also the painting I produced during the final live performance in Paris exceeded the quality of the ones I produced in earlier rehearsals. Some professors had previously noted a weakness in my practice visuals, suggesting that they could only be fully appreciated by people who had attended the performances. This was a fact that concerned me before my final Paris performance and I was greatly relieved to overcome it.

I received some feedback from some of the audience in Paris that they felt the drawing performance was too simple. For me, however, the simplicity of the drawing performance was actually crucial to getting rid of logical contemplation in order to stimulate people's sensibilities.

Particularly in the contemporary art industry, people prefer to see a certain conception or logic behind a series, which I think is a very noticeable characteristic of especially French people. Perhaps therefore, they would have welcomed me providing a rationale to explain the relationship between the music, drawing and smell before my performance or even after it using a caption next to the displayed painting. It was, however, actually intentional that I did not mention more detail. As I wrote above in "Concept", the most important thing I wished to achieve with this piece was to stimulate our subconscious sensations in order to enjoy art in a more intuitive way. Art is supposed to be something not understood by our brains processing it, but rather our feelings perceiving it. This is one of my main motivations to proceed with this project. Using a heightened awareness of our bodies and engagement with our sensations, I hope to unlock a huge potential of new art form.

I obviously need to improve the process of presentation in order to make the form clearer and more powerful, but I am still optimistic about the possibility to approach art in this way and am very motivated to reach the next level.

FORME D'ODEURに参加して
山田葉子(À ce moment ピアノ演奏)



今回のパフォーマンスについて始めからはっきりしていたのは、匂いがする中、合図でピアノ演奏とドローイングが始まり、曲が終わればドローイングも終了となること、音楽は山田葉子(ひら)が選択した曲ということだけでした。

香り作りについては、その曲の主となる和音を3つ選び、それらの音から香料1を参考にして調香師に作ってもらいう私には思いもかけない方法でした。

開始の合図以外は彼女とのアイコンタクトもなく、何色をどこどのように塗っているのか奏者には見えません。こちらは匂いと音とそこに居る人々の気配だけを感じながら曲を弾き進めていくので、正直なところいつも心もとなさが伴いました。香りもほのかにする程度でしたから、リハーサル・本番共に匂いの記憶が極めて薄いのです。このパフォーマンスは香りと色と音のどれか1つだけが「主役」ではないコラボレーションでしたから、もっと三者の緊密性が欲しいと感じました。香り選びにも立ち会い、日々の練習も香りが立ち込める中で行ってみたかったと思っています。

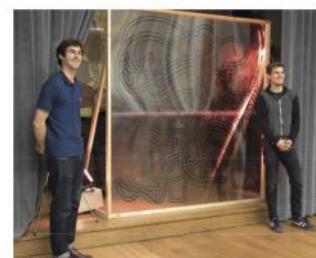
このパフォーマンスの「音」の担当としていつも心にあつたのは、描き手である彼女が魅了された曲と、そこから選択した香りの中で、いかに活き活きと「金色の魚」を泳がせる様に弾くか、ということでした。

クラシック音楽の演奏は即興と異なり、楽譜という記録を頼りに作曲家が当時何を意図していたか探りながら日々練習を重ね、楽譜を通して作曲家と奏者の費やした「時間」を音に込め、それを空間に放ち再現する表現です。ドビュッシーが100年以上前にパリで作曲したものを今この様な形で、当地で音にして人々に聴いてもらえたのは、何かの因縁からと思いたくなるほど稀な機会でした。パフォーマンスの色の痕跡として残っている作品を改めて見ると、思い切った試みだったゆえに、2回のリハーサルを含め脳裡に鮮明に残るものとなりました。

次のパフォーマンスの土台となることを大いに期待します。

1 HILA YAMADAのページを参考。

Invisible discussion
Elliott CAUSSE



Performance 15min - PVC panel, acrylic ink, Piano and incense, with Théo Lescot at the piano

~Description~

"This exhibition is about smelling. I wanted to talk about incense for its spiritual and esoteric power that facilitates the flow of our energy outside of our physical bodies. It is used for meditation and ritual off all type. Then I invited Théo Lescot to participate to a «ceremony». He will improvise at the piano as well as I will improvise my shapes on the PVC panel. We will discuss without words, by sound and shapes, all connected by smelling of incense. Then, the panel will stay as a remain of this special moment."

~The actual situation~

He partitioned the space between them and audience by PVC panel, which was on a stage and spotted by two red lights from the behind with the room lights turned off. He burned 4 incenses during the performance between him and the panel as well. Audience gathered in front of the panel and saw them performing throw it. He used his customarily tool which is a sort of pen he can draw double lines in a same time with.

~Comment~

They were succeed to draw people in very mysterious world with delicate silence. The fact that he divided the space completely by the panel, incense smoke and lights remarked their illusion and made us feel like we were watching a film or something happening in a totally different world from where we were. It was very clear to see their wordless conversation between music and drawing and their interactive relation was stably matched. Therefore it got dynamic and impromptu impression but perfectly under control in a same time.

(H.Y/h.y)

結びにかえて—FORME D'ODEUR展が遺したもの

岩崎陽子（嵯峨芸術大学 Curator）

2015年11月13日金曜日は忘れ得ぬ日となった。フランス・パリによる同時多発テロが勃発し、120名を超える犠牲者が出た。ちょうどその週の始めにパリでの日仏香りのアート学生交流展「FORME D'ODEUR」を終えて日本に帰国していた私たちPerfume Art Projectの6人のメンバーはすぐに遠く離れたパリの仲間に安否確認を行った。幸い知り合いは無事であったが、つい数日前まで共に談笑しながら歩いた街並みの無残な映像を見た私たちは、言葉を失うしかなかった。宗教や政治、イデオロギーや人種の間に立ちはだかる寒々とした壁は、パリの街中やメトロの中ではしばしば見かける、銃を持つ軍服姿の兵士や警官、明らかに貧しい暮らしを強いられている中近東の人々の無気力で暗い眼差しからも、体温としてじわじわと伝わってきていた。そうしたこの全ての結果が今回のこのようなテロを引き起こしたのだと思うと、事態の深刻さは遠く離れたアジアに住む私たちにとっても他人ごとではない切迫感を持って伝わってくる。私たちは大事な何かを見て見ぬふりをしてこなかったか、こんな時にアートに何ができるのか、特に香りのアートには。研究会のメンバーは各々の胸に何度も問いかけたことであろう。

京都嵯峨芸術大学には「味と匂い研究会」という教員による研究組織がある。その実働部隊として、教員と学生を含むPerfume Art Projectという香りとアートの関係について制作を通じて研究する由外参加型の共同研究グループがある。本学の大・短大・専攻の教員や、院生から1回生までが専攻や分野の壁を越えて集い、研究活動を行っている。

当プロジェクトでは2015年早春にパリのエコール・デ・ボザールの川俣正教授ゼミの学生11人を京都嵯峨芸術大学に招き、香りのアートを共同または個人制作することによって学生交流を行った。およそ週間の京都の滞在のうちで、印象に残った滞在経験を香りのアートとして作成したパリの学生たち、そして香りとアートについて悩みながらもパリの学生の感受性にインスピライアされて制作を行った総勢30名を超える日本の学生たち。交流の成果は京都市内5か所に展示され、ちょうど京都国際芸術祭PARASOPHIAの時期と重なったこともあり、多くの鑑賞者に恵まれた。

約半年後の10月末、この交流の成果を引き継ぎ、今度はホームとアウェイを入れ替えるかたちで、日本の学生がパリに滞在し、香りのアートの展覧会をパリの学生と共に、郊外に位置する国際大学都市日本館で行うことになった。今回は精緻たちを選抜する形式で、春よりもかなり規模を縮小して実施した。日本側からは春の交流に参加していた大学院1回生の梅津順一（油絵）、四大回生の竹内智子（觀光デザイン）、短大専攻科2回生の高尾みなみ（日本画）、四大回生の木暮愛季（デザイン）、そして新たに今年入学して加わった短大1回生の山田整（日本画）の5人がパリに渡ることになった。パリ側には春に交流を行った中からキュレーターの岩崎が5人にオファーを送り、計10名の日仏香りのアート学生交流がパリで実現することになった。

春の交流の成果を生かし、全員が新たに香りのアートのオリジナル制作をすることを約し、夏休み前から京都とパリで学生たちは各自制作の構想を練り始めた。9月に入ったらは英語による制作プロポーザルの提示や広報の準備などを学生たちの手で行い、お互いの制作案を練り上げていった。展覧会の名称やフライヤーのデザインなども学生たちがアイデアを出し合い、メールのやり取りで次々と準備も進めていった。この時期、日本側では京都出町柳柳形商店街に位置するイベントスペース「Deまち」のお声掛けにより、2015年10月10日～12日の間、「Perfume Art Project @Deまち」（香りのアートミニ展覧会）を開催させていただくことになった。メンバーは忙しい中でもこの機会をパリの展覧会の前哨戦と位置づけ、この日に照準を合わせて作品完成を試み、万全の態勢で展示に臨んだ。しかし実際に作品を展示したり、パフォーマンスを行ったりすると、様々な問題点や反省点が見えてくる。この経験を生かして作品最終調整の追い込みを行い、とうとう10月29日にメンバー全員が作品を引っ提げてパリで合流することができた。

パリ到着の翌日にはボザールを訪問し、制作の相談や搬入の打ち合わせを行い、また会場となる国際大学都市日本館のスペースを確認した。それからはとにかく制作、

制作の毎日。華の都パリにありながらストイックな制作の日々を過ごしてようやく11月1日のヴェルニサージュ（展覧会初日）を迎えることが出来た。当日は非常に盛況で、オープ直後に行われた山田整のパフォーマンスには80人近く人が訪れ、終日総計100名を超えるパリの一般市民や留学生、通りすがりの人々が香りのアート展を満喫した。あちこちでライブ音楽が鳴り響き、音楽に合わせて踊る人や歌う人、その楽しげでオープンな態度には日本での「展覧会」という堅苦しい制度にはない率直さや温かさがあり、芸術をより身近に楽しむ積極的な心持ちが見てとれた。

本展覧会の制作過程や各作品内容については、学生たちが前頁までに深い省察を試みてくれているのでここで割愛する。私はキュレーターとして大したナビゲートもせず、制作に口を出すことはほとんどなかったが、日本の学生に一つのことだけは伝えた。それは「何か素材に匂いを付けたら香りのアートになるのではないか」ということである。「香りのアート」と聞いて思い浮かべがちなのは、造形芸術に何かの付香がしてあるものか、特殊な香りをもつものを通して文化的背景を問うもの（フランスのチーズや日本の納豆など、主に食品）である。このような作品は残念ながら春の交流でもいくつも見られた。そうしたクリエイションを越えて、香りに何ができるか、それが春の交流を越えるための、私から学生へ課したたった一つの課題であった。香りとは何かの匂いだけではないこと、それは空間を形成していること、空間には匂いだけではなく音、光、温度、湿度が存在し、目に見えるもの以上に、目に見えないものでありながら私たちに多大な影響を与えること。香りのアートとはそうした「空間」の創出、またそれへの気づきと、それらを通じた視覚に頼らない新しい世界観なのである。

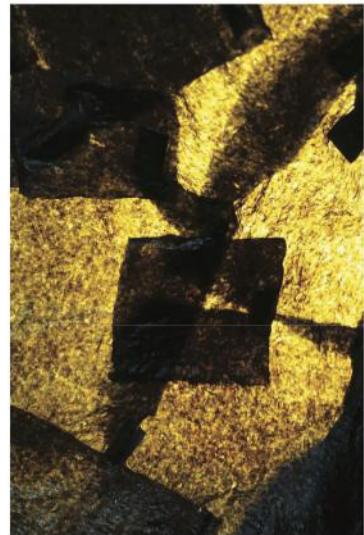
空間の相遇にセンシティブに気づくことを願って、今回の交渉では学生たちにあえてホテルをとらず、パリ滞在中の6泊を、私と共にパリ在住の嗅覚アーティストのBoris RAUXの自宅に滞在してもらうことにした。個人宅に宿泊して異国の生活文化の違い（衣食住すべてにわたる）を目の当たりにし、どっぷりと体感することによって、生活中に

占める香りや匂いの役割に気づくことが多かったはずである。見たこともない素材で調理をし、体を洗い、眼のこと、こうしたこと全てが香りの展覧会の内容を下支えし、あらゆる活動に影響を及ぼした。また言語の壁の問題も痛烈に感じ取り、せめて英語が話せるようになりたいと帰國後に改めて語学の勉強を始める者もあった。

こうした展覧会開催にとどまらない、身体ごと浸るような文化交流を終えて帰国した直後に目についたのが、冒頭のパリでのテロのニュースであった。人間は日常生活すべてにわたってクリエイションに侵されながら生きている。特に視覚的なものによる絞り型の判断は世に溢れている。様々な「許せないこと」「我慢できないこと」「抹殺したいこと」を形成するものの根柢を見つめるために、あらゆる判断を一旦保留すること。それは容易な試みではない。しかし目を閉じ、耳を澄ませると立ち現れる「空間」に身を浸すとき、そこには表れて来る新しい世界を、香りのアートを通じて生成することはできないだろうか。学生の考えた今回の展覧会名称「FORME D'ODEUR」とは、「匂いの形」という意味である。目に見えない匂いを、形をもつ造形芸術として提示する。際、人は必ず自ら被っている文化的フィルターの存在を体感する。匂いを形にする行為は、自らの、そして同時に他の者の在り方についての、鋭く深い省察の方法の一つなのである。

今回交流に参加した若い日仏の学生たちはその第一歩を踏み出したばかりである。FORME D'ODEUR展が着手しつつも積み残した課題はまだまだあり、次の一步をためらってはいられないのである。

最後になったが本プロジェクトにご協力下さった笛川日仮財団様に心より感謝の辞を捧げる。若い学生が交流を通じて、平和で希望に溢れた未来を築くことを願うものである。



« FORME D'ODEUR »

Yoko IWASAKI

Professeur d'esthétique et de philosophie de l'art

KYOTO-SAGA UNIVERSITY OF ARTS
et l'École Nationale Supérieure des Beaux-Arts de Paris

Vous priez de bien vouloir assister au vernissage de l'exposition

Le Dimanche 1er Novembre à 15H00

en présence des artistes



FORME D'ODEUR

Tomoko TAKEUCHI Jules LESBEGUERIS

Junichi UMEZU Clédia FOURNIAU

Minami TAKAO Morgane JOANIN

Hila YAMADA Elliott CAUSSE

Airi KOGURE Elsa MARC

Invité Spécial
Boris RAUX

Du 1er au 8 novembre 2015

avec le soutien de la Fondation Franco-Japonaise Sasakawa

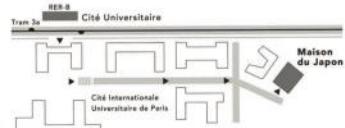
Commissaires d'exposition: Yoko IWASAKI / Elsa MARC

VERNISSAGE LE DIMANCHE 1er NOVEMBRE de 15h à 21h

Ouvert du dimanche 1er Novembre au dimanche 8 Novembre 2015
lundi-vendredi de 17h à 20h30, samedi-dimanche de 12h à 18h
Entrée libre et gratuite

Performance par l'artiste Hila YAMADA dimanche 1er Novembre à 16H00
Accompagnée au piano par Yoko YAMADA

Informations: Facebook événement et page : Forme d'Odor
forme.odour@gmail.com - +33(0)6 08 40 34 57



Maison du Japon - La Cité Internationale Universitaire de Paris
CILP - 7c Boulevard Jourdan, 75014 PARIS
(RER B/T13e - Cité Universitaire, bus- 21 et 87 Stade Charléty)



Bureau des Particuliers
CITOUSA



Photographie: «Nori» 2015 Jules Lesbegueris

「FORME D'ODEUR」図録

2015年11月30日

執筆者

梅津順一 高尾みなみ 木暮愛李
竹内智子 山田整 山田葉子 岩崎陽子

監修

岩崎陽子

編集・表紙デザイン

高尾みなみ

発行

京都嵯峨芸術大学 味と匂い研究会 Perfume Art Project

〒616-8362 京都市右京区嵯峨五島町1番地

075 - 864 - 7858